

「クモ (SPIDER)」としてのわたしたちを記述する： 「網の線」のなかで見出される「やさしい日本語」 Describing ourselves as “SPIDER”s : “Yasashii Nihongo(easy Japanese)” constructed amid lines embeded in our meshwork

石田 喜美

Kimi Ishida

†横浜国立大学

Yokohama National University

ishida-kimi-rm@ynu. ac. jp

概要

本発表では Ingold(2011=2021)の「クモ(SPIDER)」という比喻を手掛かりにしながら、対立や葛藤をはらむフィールドにおける記述・分析のありかたを考察する、具体的には、石田・半沢(2004)で示した事例を、新たに記述し直す試みを行った結果を報告する。当日は、この事例を通じて、葛藤が渦巻くフィールドにおいて見出される知を記述する方法について、参加者とともに議論したい。

キーワード：フィールド(field) 研究者(researcher) クモ (SPIDER) アクティヴ・インタビュー(active interview)

1. はじめに：「アリ (ANT)」と「クモ (SPIDER)」

オーガナイズドセッション「価値中立性への志向を捨て実践の葛藤に飛び込む」(以下、本 OS) では、状況論が従来用いてきたアプローチのなかで、研究者が「それぞれのフィールドに対して一定の距離をもち、超然と」した存在として描きだされてきたことが指摘されている(本 OS 概要)。アクターネットワーク理論(以下、ANT) を例に挙げればそこで「研究者」は「媒介物も含めた社会連関をフラットに記述し」ようとしてきた(同上)。その場合、研究者は、その場の社会連関(以下、ネットワーク)を描きだすアクターの1つに過ぎなかった。ANT 的な記述への態度が、方法論的な「中立」を担保してきたのだ。そのため、フィールドにおいて、対立に巻き込まれ、価値の葛藤に悩みながら、フィールドに生きる人々とともに価値を模索し創り上げていくような研究者の姿は、ほとんど描きだされてこなかった。

ではこのような研究者を記述する方法はあるのだろうか。本稿では、Ingold(2011=2021)が提示した「クモ

(SPIDER)」という比喻を手がかりに、この問いについて考えてみたい。Ingold は ANT を批判する小論(第7章「アントがスパイダーと出会うとき：節足動物のための社会理論」)のなかで、「アリ (ANT)」——アクターネットワーク理論(Actor Network Theory)——と「クモ (SPIDER)」——発達を通して身につけた感受性を伴う熟練した実践(Skilled Practice Involves Developmentally Embodied Responsiveness)——を登場させ、「アリ」にとってのネットワークと対比させながら、「クモ」の「メッシュワーク(meshwork)」を説明する。

上記の文献のなかで、「クモ」は「アリ」に対し「私の網の線は、あなたのネットワークの線とはまったく異なっているのです」(Ingold 2011=2021, p 222)ときっぱりと言い放つ。「クモ」は、「アリ」が考える「関係」には素材の居場所がないのに対し、「私の網の線は、それ自体が私の身体から出た素材で紡がれ、私が動き回ることによって敷かれてゆくのです」(同上)と説明する。

ここで Ingold が提示する「クモ」の「網の線」というイメージは、複数の価値が対立し、価値の揺らぎが頻繁に生じるフィールドにおける研究者のありようを考えるうえで示唆的だ。このようなフィールドにおいて、ネットワークは常に不安定であり、揺らぎつづけている。固定したネットワークがあったとしても、研究者はむしろそこに揺らぎを見いだそうとする。そのようなフィールドにおいて研究者は、まるで「クモ」のように自ら「網の線」を生みだしながらその上を動き回り、そのなかで何かを知ろうとする。

2. 動きまわり知る研究者を、記述する

アネマリー・モル『多としての身体：医療実践における存在論』(Mol, 2003=2016)は、そのような研究者の姿と、そのような研究者によって見いだされる知見ととともに記述する方法について、大きな示唆を与えてく

れる。Mol は、「ある一つの多としての疾病と、それが一つの病院とその周辺でどのように扱われるのかに関するスナップショット的な物語」(Mol, 2003=2016, p19)を描きだすとともに、同ページ内にその民族誌的物語を問い直し文献へと結びつける「サブテキスト」(同上, p20)を併記する。Mol はアテローム性動脈硬化症をとりまくネットワークを動きまわり、そこで自身が見いだしたことを「スナップショットの物語」に統合するとともに、それを文献へと結びつけていくのだ。

Mol は、フィールドと書齋とを行ったり来たりしながらあるときは民族誌的物語を描き、あるときはそれと文献とを結びつけるサブテキストを記述する。Mol の記述は、そのような研究者 Mol の移動の軌跡そのものを浮かび上がらせる。

この記述方法は、ネットワークを動き回りながらそのなかで何かを知り書くための有用な方法を示す一方、Mol がまなざしをむけるのは、あくまで、アテローム性動脈硬化症をめぐるネットワークと、そのなかで見いだされる(多元的かつ一つでもあるような)身体の姿である点には留意が必要だ。Mol 自身が、「私には、一つの全体としての医療を批判する理由もなければ、擁護する理由もない」(同上, p18)と述べているように、研究者 Mol は、そこにあるネットワークを揺り動かし、変容させようとしたりはしないのだ。

これに対し、発表者は、以前、Mol と同様に一人称による記述という方法を用いながら、より積極的に、研究者自身の存在によって生起する境界の変容を描きだそうと試みたことがある(石田, 2015)。このとき発表者が試みたのは、市民アーカイブ・プロジェクトの活動のなかで発表者自身が感じた不満や葛藤から、プロジェクト内で生成されつつあった境界を崩壊させた出来事を描きだすことであった。このとき記述・分析のターゲットになっていたのは、残すべき言葉／残すべきでない言葉という二分法であり、その間にある境界であった(石田, 2015, p45)。市民アーカイブ・プロジェクトのように、これまで人々から見過ごされてきたものを新たに意味づけ、価値づけようとする場面に関わる場合、研究者は否応なく、そこでの価値の構築に巻きこまれる。このとき一人称による記述は、その出来事そのものを捉えるための有効な記述方法となる。

市民アーカイブ・プロジェクトが、見過ごされてきたものに対して、意味や価値を生みだしていくフィールドであるとすれば、「やさしい日本語」の使用場面やそれについて語る場面は、言語をめぐる価値の葛藤が現

出するフィールドであるといえよう。

古田(2021)は、「やさしい日本語」をめぐる人々が抱える葛藤を、「やさしさ」と「豊かさ」の緊張関係として説明する。「やさしい日本語」は、日本語母語話者・非母語話者双方に、コミュニケーションの成功可能性を高め、それによって相互の文化への多角的な理解を促すものである一方、「やさしい日本語」が日本語それ自体の規範とされてしまうことは、日本語が持つ豊かな表現の可能性を狭める危険性を持つ。古田は、ジョージ・オーウェルのディストピア小説『1984』(Orwell, 1949=2021)に登場する「ニュースピーク(Newspeak; 新語法)」を例にあげながら、このことへの警鐘を促す。「ニュースピーク」が易しくシンプルであることによって人々の思考を奪う装置として機能していたように、「やさしい日本語」もそれ自体が日本語の規範となることによって、日本語が可能にしていた複雑な思考や表現を奪うことになりかねない。異文化コミュニケーションにおける「やさしい日本語」の使用場面において、日本語母語話者は、このような「やさしさ」と「豊かさ」の矛盾や緊張関係のなかに、身を置かざるを得ない。

しかしながら、「やさしい日本語」をめぐるこのような矛盾や緊張関係は、常時顕在化しているわけではない。なぜならば、現在「やさしい日本語」は「多文化共生社会の実現」に向けた取り組みのひとつとして位置付けられ、それを肯定すべきものとする言説が広く存在するからである。しかしながら災害時等の緊急事態に思いがけず「やさしい日本語」に触れてしまう場合、あるいは話者の意志と関わりなくそれを使用せざるを得ない場面に直面したりした場合、人々は「やさしい日本語」でコミュニケーションすることへの葛藤を経験する(詳細は、石田・半沢, 2024, p443 を参照)。発表者らが実施した、教育学部生・留学生の共同ワークショップはまさに、教育学部生らが、本人の意志とは無関係に、思いがけず「やさしい日本語」と出会わざるを得ない場であった。

3. アクティヴ・インタビューのアプローチ

発表者は、このような「やさしい日本語」の使用をめぐる葛藤を知るための手法として、Holsterin & Gubrium(1995 山田・倉石・矢原訳 2004)によって提唱された「アクティヴ・インタビュー(active interview)」のアプローチを採用した。アクティヴ・インタビュー

が、その他のインタビューと決定的に異なるのは、それがインタビューの場において行われる解釈実践に着目する点だ。アクティヴ・インタビューは、インタビュー（研究者）とインタビュアーの双方が、現実を解釈するためのリソースや構造、志向性をアクティヴに結びつけていくと考える。そのためこのアプローチを用いることで、インタビュアーとインタビューとがともに、「やさしい日本語」の価値を見いだそうとする共同的解釈実践そのものを描きだすことが可能になる。

本発表ではこのようなインタビューの場で生みだされた会話を、研究者による一人称の物語として解釈するかたちで記述してみたい。

4. 研究者とのやりとりのなかで見いだされる「やさしい日本語」の価値

石田・半沢(2024)では、2名の調査協力者によるインタビュー場面を事例として取りあげていた。本発表でとりあげる、土岐田（仮名）のインタビュー場面では、土岐田自身が過去に起きた葛藤を語るというよりも、むしろ、インタビュー場面におけるやりとりのなかで、その緊張関係が現出していった。以下の会話（会話A）は、石田・半沢(2024)の「会話2」と「会話3」の間にあたる部分である。土岐田は「会話3」において自身を「ちょっと考えが古い人間」とカテゴリー化していた。では「会話2」と「会話3」の間において、いかに緊張関係が現れ、そのようなカテゴリー化実践が行われるに至ったのか。

会話A：「授業」内規範から個人内規範へ

No.	発話者：発話内容
1	I：なるほど。（T：はい。）そしたらじゃ一躊躇なく使ってたから、伝えるっていうことのために（T：そうですね）やってたかなって感じですね。なーるーほーど。す <u>ご</u> いあの <u>授業</u> のことを考えてくださ <u>っ</u> てハ。（T：フッフ）ありがとうございます <u>す</u> としか言いようないけど ¹ 。なるほどね。じゃ自分自身が英語を使うのが嫌とか ² 、そういうことがあるわけじゃないのね。
2	T：えーっとそうですね。あーのー、使えるかどうかは別ですけどー、あーのー、まあ使うべき時が来たら使うべきだとは思ってます。
3	I：今回で言うとな、「やさしい日本語」の <u>授</u>

	<u>業</u> だよっていうー趣旨がとっぱらわれていたとしたら使うべきだ、と思ったー。
4	T：うーん、ま、そうですね。はい。あの単純に留学生と交流しようであつたら、あーのー、ま、それが英語の <u>授業</u> なのか国語の <u>授</u> <u>業</u> なのか分かんないですけど。
5	I：うんうんうん。
6	T：あのコミュニケーションをとることがやっぱ、大事なので、まあうーん必要があれば英語を使ってもいいと思う。ぜんぜん思います。
7	I：なるほど。
8	T：はい。
9	I： <u>コミュニケーションをとる上で（は）「やさしい日本語」より、英語のほうが、良さそう³。</u>
10	（・）
11	T：あー、それはたぶん相手によりますね、本当に。あー。
12	I： <u>今回だとどうでしょう？⁴</u>
13	（0. 8）
14	T：今回は（・）うーん。（・・・）うーん。ま、日本語メインのほうがいいとは思いますが。
15	I： <u>お、その、心は⁵。</u>
16	T：ここが日本だからですね。
17	I：おー！（・）どういうことでしょうか？アハハッ
18	T：あの、うん、ちょっと考えが古い人間なので、
19	I：いいですよ、そんなんいちいち言い訳いらないから大丈夫ですよ。
20	T：ヘッヘッ、いやなんか郷に入っては郷に従えみたいな考えが、ちょっとあるので。あーのー、まあわざわざ日本に居るのだから、その日本語抜きでは、生活たぶんできませんしー。っていう意味ではまあここでは、その留学生ー、ではありますけどー、まあ、日本語をメインに会話をするのがー、まあ向こうに向こうにもプラスになりますしー、あーのーこちらとしても、そのー、まあ日本ですから、日本語を使って、全然問題ないんじゃないかなとは、思います。

会話 A が始まる直前、「会話 2」の最後で土岐田は「授業の趣旨がそもそも「やさしい日本語」だったんで」(2-14), 「やさしい日本語」を使うようにしたと述べている。この発言, すなわち, 「授業の趣旨」が「やさしい日本語(を使用すること・学習すること)」であったためにそれを使用したのだという土岐田の発言は, わたしを, 授業担当者としてカテゴリー化する実践であった。この実践によって, 土岐田は, ある言語を選択したことへの責任を逃れ, その責任を授業担当者であるわたしに帰すことができた。わたしはこの時, 焦燥感と居心地の悪さを覚えた。「授業」を前提としたインタビューが展開されることで土岐田自身の価値観に関する語りが聞けなくなってしまうことに焦りを感じた。また, インタビュアーとしてその場にいらなくなってしまうことが不安だった。そこでわたしが返した言葉が, 「すごいあの授業のことを考えてくださってありがとうございますとしか言いようがないけど」(A-1, 破線部)であった。ここでわたしは, 「授業担当者」というカテゴリーを一旦引き受けつつ「…としか言いようがないけど」と付け加えることでそこから距離をとろうとしている。インタビュアー(研究者)として会話に参加していることを示そうとしている。

わたしはさらに続けて, 「自分自身」(A-1, 破線部 2)という語を用い土岐田の言語使用に対する感情(「嫌」)について尋ねることで, 土岐田自身の言語に対する価値観に焦点を当てようと試みた。しかし土岐田はあくまで「授業」(囲み部)を前提とした言語選択について話し続けた(A-2~A-4)。わたしはさらに焦燥感を抱き, 何度も同じような応答を繰り返した。「…趣旨がとっぱらわれていたとしたら…」(A-3)と条件を付けて質問するなどしながら, 個人を主語にするかたちで, 土岐田の回答の意図を確認しようとし続けた。

このようなやりとりの繰り返しの後に変化が生じるのは, A-9 の問い(A-9, 破線部 3)である。この質問のあとには1秒間の会話の間が生じ, そこからインタビューは, 「授業」を前提としない価値が語られる場へと変貌する。その結果 A-12 の問い「今回だとどうでしょう?」(A-12, 波線部 4)という, 授業内での経験を問う質問に対しても「授業の趣旨」は持ち出されずに, 土岐田個人の価値観に基づく回答が行われる。

石田・半沢(2024)で示したような「ちょっと考え方が古い人間」という土岐田自身のカテゴリー化は, このようなインタビューの展開, すなわち, 言語ヒエラルキー上の「英語」と「やさしい日本語」の位置づけをリソー

スとして活用しながらインタビューを展開するなかで生み出されていったと考えられる。

5. まとめ: 「網の線」を生み出す研究者

アクティヴ・インタビューは, インタビュイーとインタビュアーの双方が, 現実を解釈するためのリソースや構造, 志向性をアクティヴに結びつけていくと見なす(3. 参照)「クモ」としての研究者は, 自身が知りたい, 出会いたいと願う未知なる物事に向けて自ら「糸」を吐き, 「網の線」を創り出しながらインタビューの場を創りだしている。もちろん「網の線」を創り出しているのはインタビュアーだけではない。土岐田が会話 A 中, 「授業」という枠組みを保持し続けたように, インタビュイーもまた「網の線」を生み出している。インタビューという場においては, このような「網の線」の絡み合いが生じている。そして, そのなかでインタビュイーとインタビュアー(研究者)双方が動きまわりながら, 意味や価値が生み出されていくのだ。

文献

- 古田 徹也(2021). いつもの言葉を哲学する 朝日新聞出版
- Holstein, J. A., & Gubrium, J. F. (1995). *The active interview*. Sage Publications. (ホルスタイン, J. A. & グブリアム, J. F. 山田 富明・兼子 一・倉石 一郎・矢原 隆行(訳)(2004). アクティヴ・インタビュー: 相互行為としての社会調査 せりか書房)
- Ingold, T. (2011). *Being Alive: Essays on Movement, Knowledge and Description*. Routledge. (インゴルド, T. 柴田 崇・野中 哲士・佐古 仁志・原島 大輔・青山 慶・柳澤 田実(訳)(2021). 生きていること: 動く, 知る, 記述する 水声社)
- 石田 喜美(2015). アーカイブづくりの活動における境界のデザイン: 水戸芸術館現代美術センター高校生ウィーク「アーカイブ」を事例として 質的心理学フォーラム, (7), 36-47.
- 石田 喜美・半沢 千絵美(2024). 異文化コミュニケーションにおける「やさしさ」とは何か: インタビュー場面における「やさしい日本語」をめぐる価値の葛藤 認知科学, 31(3), 443-458. <https://doi.org/10.11225/cs.2024.024>
- Mol, A. (2003). *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*. Duke University Press. (モル, A. 浜田 明範・田口 陽子(訳)(2012). 多としての身体: 医療実践における存在論 水声社)
- Orwell, G. (1949). *1984: a Novel*. New American Library. (オーウェル, G. 田内志文(訳)(2021). 1984 KADOKAWA)